

## 子どもの死の意識における感情表出年齢と道德教育

上 蘭 恒太郎

### Children's Age Correlated to Feelings Concerning Death: Implications for Moral Education

Kohtaro KAMIZONO

#### I 道德授業と子どもの死の意識研究

##### I-1

生命の尊重は近年道德教育の中で重要な位置を占めるようになった。それは学習指導要領と指導書に現れている。そこに三つの理由を認めることができる。ひとつは学校を取り巻く昨今の状況変化であり、もうひとつは道德授業で取り上げられる価値の構造化によってである。また環境、健康など社会の向かっている方向も、生命の尊重をますます深く考えるべきテーマにしている。

理由のひとつに、子どもの自殺やいじめを含む荒れる学校対策として道德教育が注目され、その中核に生命の尊重が据えられてきた経緯がある。1987年12月の教育課程審議会答申において道德教育の充実が述べられ、1988年3月には文部省によって「生命を尊ぶ心を育てる指導」がうちだされる。以来この方向は1989年3月の学習指導要領改訂に盛り込まれ、また教科に先駆けて出された小学校指導書道德編において生命の尊重が強調されることになる。小学校指導書道德編において「生命に対する畏敬の念」は、改訂によって新たに加えられた道德授業の「目標」の一つであり、「人間尊重の精神をさらに深化させ、生命のかけがえのなさを理解させること」が要請された。中学校教育でも事情は同様であり、中学校学習指導要領道德の章の冒頭に「人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念」が記述される。

もうひとつは道德において指導される内容項目が構造化されてきたという事情がある。学習指導要領において道德で扱うべき内容が4つの視点から分類整理され、内容項目の重点化がはかられ、さらに道德教育の全体計画と年間指導計画作成が明記されたことによって、1道德授業時間に1内容項目を当てはめて道德授業を消化するやり方は変更を求められ、内容項目を構造化しなければ各授業と計画がたて難くなった。道德で扱う内容の構造化は指導要領による必要からだけではなく、道德授業の改善を志向するところからも要請されてきた。いわゆる葛藤資料が道德の一つの価値を実行に移すかやめておくか、どちらにするかの葛藤だけでなく、複数の内容項目相互の葛藤をも取り上げるとき、価値相互の重要性の判断なり状況の中でどのように使い分けるかなり、価値の関係が問われるところでは価値関係を構造化する必要がある。同様の構造化の必要は、価値が相互補完する関係にある道德資料においても生じる。また道德性を発達の観点から捉える場合、同一の内容項目であっても発達の観点から分節化され、時間系列にしたがって構造的に配置されるこ

ともなる。また価値が相互に葛藤する状況を設定し、子どものなかに構造化された価値関係をうみだすことで、道徳性の発達を促す考えもある<sup>1)</sup>。生命の尊重は、このような構造化の流れのなかで、核心となる価値として重要性を増している。生命の尊重は、場合によって内実が変化する価値からすれば、また二者択一を迫られた場合の生命の重要性からすれば、重要視されてしかるべきである。

生命の尊重の項目が着目されるもうひとつの要因を付け加えておくべきだろう。環境教育の名称が生まれてきた点にみられるように、いわゆる環境問題を扱う機会が学校教育でも増えている。道徳授業との関連では、「自然環境を大切にする」との内容項目だけでなく、生命の尊重との関連でもこのテーマは取り上げられることが多い。また健康教育の理念の部分を生命尊重の授業が関連してあつかうこともあろう。食品添加物、薬品への注目、禁煙権の広がりなど、健康へと視線を向ける時代の流れとしても生命尊重の項目は重要性を増している。

## I—2

これにともなって道徳授業のための読物資料としても生命の尊重が取り上げられる機会が多くなる。これまでのこの分野の資料は<sup>2)</sup>三つに分けられる。1) 誕生や、生命を守った話など生の喜びを描くもの、2) 病気や事故など生命の危機状況を設定して生命の大切さに気付かせるもの、3) ペットなど死について取り上げるもの。生命尊重の資料と授業で気づくのは、死を下敷にして逆に生命について考えさせようとする場合が多いことである。直接死を持ち出す場合だけでなく、生命を守ることの切実さや生命の危機も、詰まるところ死に生命の大切さを示すためのバネの役割を与える。正面から取り上げられることは少ないが、死は、すでに道徳授業で役割を果たしている。資料構成において実際死ぬ話はやめよう、命が危ないことは強調しても最後は助かった話にしようなどの意識が働くことがすでに逆説的に、死を物語のテーマにしている。むしろ直接資料に描かれた死の方が軽いか、物語の死には象徴的に別の意味あいが付されているかであったりする。

今日、性に関して適切な情報の必要が認められたように、死についても放置すべきではないとの考えが広がってきた。医療関係での論議（肉親の死や子どもたち自身が死に直面するケースに対処せざるを得ない）、学校保健関係者の注目（学校保健に携わる人々の間で死の教育を保健において取り扱うべきだとの認識が生まれている）、欧米諸国での死の教育（死の教育のプログラムが開発実践されている）、生涯教育による教育の視野拡大（生涯教育の基礎としての学校教育というキャッチフレーズが場当りの飾りでなければ、死を視野にいれないわけにはいかない）、そして道徳教育での生命尊重の重視によって、その必要性が認められてきている。

死の教育は、性教育が授業になり、環境教育が語られ始めた今でも、学校教育の中では取り上げられるに至っていない。しかし死というテーマは道徳教育に限ってみてもすでに授業内容に入り込んでいる。そうであるならば、死の教育は、それを学校教育の中で取り上げることが適切か否かをふくめて、表だった論議にのせる必要がある。

子ども自身は一般に大人が推しはかるよりも死に対する関心が高く、死について知りたがっている。死に関する調査の過程では、話すいい機会に恵まれたといった反応もうかがえた。関心の高さにもかかわらず子どもたちは話す適当な機会を得ないまま、今日この関

心を、子どもの間での死に関するブームとして消化しているように見受ける。また子どもの死の関心は、大人からは、悪いことをすると地獄に落ちるといった、しつけに使われているようである。子どもたちは、いびつな情報と、タテマエとしての生命尊重の暗がり、死について考えている。

死に関する話題は、大人からはタブー視され、教育関係者も避ける傾向にある。教師自身が整理できていないし、宗教教育や家庭教育との関係を考えると及び腰になるのであろう。その結果子どもたちには、話のできる場、質のいい情報を得る機会が少ない。

問題はまた、子どもの死の意識に関する研究が、死の問題を学校で扱うための支援をするほど十分ではない点にもある。学校教育に向けた情報の整理と提供というつなぎの部分で十分でないだけでなく、子どもの死の意識研究が十分ではない。死に対して子どもにどのようなカウンセリングしたらいいかに関する研究や本が出されている状況下においても、そうである。子どもが死を擬人化しているかや、死の普遍性、不可逆性といった水準での概念形成と死への対処機制など新たな問題が解消している研究状況でもない<sup>3)</sup>。整理された情報が教育の場に流される体制になるにはまだ解消しておくべき課題がある。子どもの死の意識研究はこれまで心理学の分野とアメリカ合衆国で多く遂行されてきたが、日本で死の教育を始めるならば日本における調査が、また教育学において死の教育の意味を総括的に位置づけておく研究が必要である。

## II 調査方法

### II—1

本論文では子どもたちがどのような角度から死について考えているのかを明らかにする<sup>4)</sup>。死について語る際に、天国（別世界）の存在について語るのか、感情について語るのかは、それ自体死に関する思考様式である。死に関して何が関心の中心にあるかは子どもの思考領域を知る総括的な作業として必要である。

これまで多くの研究は、死の理解に関して不可欠と思われる概念の構成要素、たとえば普遍性、不可逆性、非機能性をとりあげ<sup>5)</sup>、これを理解しているかどうかによって、子どもが死を理解しているか否かを判断しようとしてきた。しかしこのような研究においては方法論上、死についての‘成熟した’概念を前提することになっている。果たして死の理解について大人が一般的にもつとされる‘成熟した’概念があるのか、どこかに（例えば大人の一定の年齢段階に、一定の文化圏に）見られるとしても、その概念から子どもの意識を読み取ることが死を一定の型枠から判定することにならないかとの疑問なしとしない。現代の大人の多くが受け入れることのできる死の概念の構成要素が、死とは何かの答であるのか、そのような概念を子どもがもつことが発達なのか、検討すべき課題である。このような研究方法に対してすでに H.-J. クラットは、「豊かで含蓄的な死の概念が切り詰められ貧しいものにされた」、「方法論的な洗練を示していると同様に文化的な偏狭性を示している」と反省し、死の概念が「あまりに文化に依存している（この場合は北米の文化に——引用者註）」と、これまでの研究の普遍性の再検討を課題とする発言をしている<sup>6)</sup>。

子どもが死を擬人化しているという一般論については、筆者が、アニミズムはあっても、長崎の子どもたちに擬人化はみられないこと、その要因は文化的背景にあるとの考察をおこなった<sup>7)</sup>。本論では、方法論上のここに指摘した問題には立ち入らないが、概念の形成

だけではなく、感情について語るにしてもそれもまた死についての思考様式の一つだとの方法論上の態度から出発する。死について語るにどれほど感情について語るをもってするかもまた、死をどのように考えているかを知る上で明らかにしておかなければならない。

子どもにおける死の意識を浮かび上がらせる方法として、20歳前後の意識と比較する。これまでの研究では子どもの意識を調べるのに子どもだけを調査対象としている。その場合、子どもの意識として抽出されるものの基準をどこにおいたかが明らかにされていなければならない。成熟した死の意識を計る基準として、死の不可逆性、普遍性、最終性などが用いられるが、大人が、日本文化のなかでも死をそのように意識しているかは、改めて問われるべきである。不可逆性等の死の基準は、再生や輪廻の思想に由来するのではなく、近代的な個体の死を前提するからであろう。近代欧米で形成された基準を、その妥当性を検討することなしに子ども一般の意識の判断基準として持ち込むことはできない。一つの文化圏といえども重層的であるし、まして転生や輪廻思想がながれ、また西欧思想が広がる日本文化圏での研究は、死の成熟した意識もまた多様であるとの前提から出発することが妥当である。重層的な文化のなかで意識形成していく者の到達する意識から特徴を探ることが、事柄に即しているという意味で妥当である。そこで本論では、ひとつの到達点として20歳前後の死に対する意識を取り上げ、子どもの意識と対比する。大人の死の意識も一元的ではないとしても、20歳前後の意識は一定の文化圏の中で育った場合のひとつの到達点ではある。

## II—2

調査は1991年から1992年にかけて、長崎市および佐世保市内の幼稚園、保育園、長崎市内の学童保育所、長崎市、時津町、東彼杵郡の小学校、さらに長崎市内の大学、短期大学で行った。調査対象は次のようである。

20歳前後：総数265名。男性41.1%，女性57.4%，性別不詳の者1.5%。うち19歳が35.8%，20歳が39.6%，21歳が16.2%，22歳が5.7%，24歳が0.8%，年齢不詳だが19歳から24歳の間であることが確実な者が1.9%，平均すると19.95歳。

11歳：総数167名。男子52.1%，女子47.9%。

10歳：総数211名。男子49.3%，女子50.2%。

9歳：総数199名。男子51.3%，女子48.7%

8歳：総数341名。男子48.7%，女子51.0%，性別不詳の者0.3%。

7歳：総数339名。男子46.6%，女子52.8%，性別不詳の者0.6%。

6歳：総数245名。男子51.4%，女子47.8%，性別不詳の者0.8%。

5歳：総数139名。男子48.9%，女子49.6%，性別不詳の者1.4%。

調査は、8歳の一部までは面接により、それ以上の年齢層は調査表に書き込んでもらう方法でおこなった。基本となる質問は、＜死ぬとはどんなことだと思いますか。あなたが考えていることを教えてください＞である。回答は自由記述式であり、複数回答が許される。少なくとも日本語で質問した場合の日本の子どもたちの場合、「考えていること」との表現で、概念に関する答だけが返ってくることはなかった。「思い」と「考え」の間は区別されていないと受け取ってよいと判断される。

### Ⅲ 調査結果

死ぬとはどんなことかの全回答は以下の五項目に分類され、その次に示す二項目に該当するかどうかチェックされた。表1である。いくつかあった意味不明な回答、わずかのその他の回答および無回答は表から省いてあるが、百分率の中には入れてある。無回答は9歳の8%，5歳の7.2%が高く，7歳の2.9%，11歳の3.6%が低く，20歳では6.4%であった。以下各項目と答の例を示す。答の例は子どもの発言，記述のままを「」で示し，( )内に年齢を付した。

五項目：事柄に関して述べたもの

人に関わることについて述べたもの；業績が残る，会えなくなる，いなくなる，人を恨む，復讐する，家族が泣く  
「みんなと会えない（8歳）」「お母さん，お父さんたちを泣かせることになる（9歳）」

さまざまな死の説明

死にまつわる感情について述べたもの

わからないと答えたもの

二項目：死の原因について述べたもの；病気，事故，誘拐，殺されて，自殺

「自分でナイフでお腹を刺すと死ぬ（5歳）」

「知らない叔父さんにつれて行かれて（7歳）」

死に関わる儀式について述べたもの；墓，燃やす，壺に入れる，手を合わせる

「後ろに羽があって，お墓に行って詣る（5歳）」

「火の中で焼かれて壺に入れられる（8歳）」

このうち，事柄に関して述べたもの，感情について述べたもの，および説明は，さらにその内容の細目を表2，3，4に示す。個々の内容は次のようなものである。

事柄に関して述べたもの：になる；骨になる，灰になる，土に還える，焼かれる

「灰になって（天国や地獄に行く）（5歳）」「骸骨になる（6歳）」

動かない；息が止まる，動かない，血が出る

「動かなくなつて倒れちゃう（6歳）」「眼が動かなくなつてしまう，閉まったまんま（6歳）」「心臓が動かなくなる（7歳）」「機能が停止する（11歳）」

病気；病気が死ぬこと，手足がちぎれて死ぬ

「病気になること（6歳）」「治らない病気（7歳）」

歳；歳をとって死ぬ，寿命で

「おばあさんになって死ぬこと（6歳）」

できない；見えない，わからなくなる

「口もきけなくなる（6歳）」「友だちと会えなくなる（7歳）」「これから何もできなくなる（9歳）」

同義反復；命がなくなる，終わり

「死んじゃうこと（5歳）」「終わること（7歳）」

「人の一人の命がなくなる（8歳）」

消える；この世界から消える，いなくなる，滅びる  
「世の中からいなくなる（10歳）」

感情に関して述べたもの：悲しい 「悲しいことばかり（6歳）」「かなしいことだと思う（7歳）」

寂しい 「（友だちと別れるから）寂しい（8歳）」「一人ぼっちになること。さびしい。（11歳）」

恐い，恐ろしい 「（テレビを見て）恐ろしくなった（8歳）」

苦しい 「（命がなくて）つらい思いだなあ（6歳）」  
「苦しく痛いこと（11歳）」

可愛そう，残酷 「かわいそうなこと（6歳）」「残酷だと思います（11歳）」

嫌なこと，悪いこと，死にたくない  
「いやなこと（6歳）」「死ぬことは嫌だと思う（11歳）」

楽になる，明るい，いいことがありそう  
「死んだら天国に行く。少しだけ悲しそうで，いっぱい楽しそう。（5歳）」「いままで苦しかったことも全部忘れて，体がとても楽になること（11歳）」

何とも思わない，当たり前，しかたない  
「人間ともかく動物植物なら当り前のこと（11歳）」

説明：他界，死後に別世界がある；天国，地獄，神の国，極楽，あの世，霊界  
「天国，地獄にいくこと（6歳）」「霊界が存在する，詳しくはわからないけど（6歳）」「違う世界に行くような気がする（9歳）」

魂などについて述べたもの；魂，霊，幽霊になる  
「魂がぬける（6歳）」「自分の体はなくなるんだけど，魂は生きている。（7歳）」

転生について述べたもの；生まれ変わる  
「天国で死んでもう一度生まれてくる（5歳）」「他の虫や生き物に生まれ変わったりする（9歳）」

他のさまざまな死の説明；眠り，地球から離れる，無になる，神，仏，天使，運命，旅立ち，解放，肉体の滅び  
「心がきれいだったらずっと生きられる。きたなかったら死んでしまう。（7歳）」「安らかに眠ること（11歳）」「ベランダから降りること（6歳）」「地球が満員になると困るから神様が考えた（6歳）」

以上のような項目による分類の集計結果は以下のである。

表 1

回答全体の分類結果

	5 歳	6 歳	7 歳	8 歳	9 歳	10歳	11歳	20歳
	%	%	%	%	%	%	%	%
事柄	20.9	19.2	23.0	29.0	32.7	37.0	46.7	40.8
感情	15.8	23.7	36.0	37.0	31.2	20.9	12.0	7.9
説明	15.0	16.7	15.0	13.5	17.6	27.9	42.0	57.0
人	1.4	2.4	2.1	3.8	3.5	5.2	6.6	8.7
小計	53.1	62.0	76.1	83.3	85.0	91.0	107.3	114.4
わからない	38.8	34.3	32.4	17.0	13.6	10.4	5.4	3.0
原因	14.4	8.2	8.0	7.3	2.5	1.9	1.2	0
儀式	4.3	3.7	2.9	2.6	0.5	0	0	1.1
計	110.6	108.2	119.4	110.2	101.6	103.3	113.9	118.5

五項目分類のグラフ

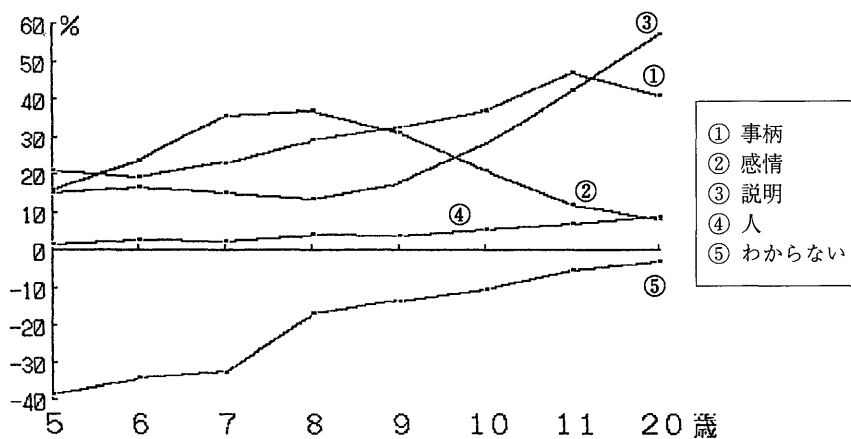


図 1

表 2

事柄に関する細目

	5 歳	6 歳	7 歳	8 歳	9 歳	10歳	11歳	20歳
事柄	20.9	19.2%	23.0%	29.0%	32.7%	37.0%	46.7%	40.8%
になる	5.8	6.5	6.2	4.7	1.5	0.5	1.8	1.9
動かない	6.5	9.4	6.8	6.5	5.0	4.7	14.4	10.6
病気	1.4	2.9	3.2	0.6	0.5	0	0	0
歳	1.4	1.6	1.5	2.3	2.0	3.8	1.2	1.5
できない	1.4	0.8	0.3	2.9	6.5	8.5	7.8	7.9
同義反復	4.3	0	4.4	12.0	14.1	13.7	15.6	15.8
消える	2.1	2.0	3.3	5.8	7.0	13.3	18.6	21.9

その他, は略

表 3

## 感情に関する細目

	5 歳	6 歳	7 歳	8 歳	9 歳	10歳	11歳	20歳
感情	15.8%	23.7%	36.0%	37.0%	31.2%	20.9%	12.0%	7.9%
悲しい	2.2	3.7	8.0	9.1	6.0	6.2	2.4	1.9
寂しい	0.7	0	2.4	0.9	0	0.5	0	0
恐い	2.2	4.5	9.7	11.7	11.1	4.3	3.6	1.5
苦しい	0.7	1.6	4.1	4.4	1.5	4.3	4.2	1.9
可愛そう	4.3	6.1	4.7	2.6	4.0	0.9	1.2	0
嫌なこと	6.5	7.8	14.7	12.0	11.6	4.7	4.8	1.1
楽になる	1.4	0	0.6	0.6	0.5	1.4	0	1.1
何も思わず	0	0.8	0	0.9	0.5	1.4	0.6	1.5

つまらない, その他, は略

表 3—2

## 感情のなかで, どの感情がどれくらいの割合を占めるか

	5 歳	6 歳	7 歳	8 歳	9 歳	10歳	11歳	20歳
感情	15.8%	23.7%	36.0%	37.0%	31.2%	20.9%	12.0%	7.9%
悲しい	14%	16	22	25	19	30	20	24
寂しい	4	0	7	2	0	2	0	0
恐い	14	19	27	32	36	21	30	2
苦しい	4	7	11	12	5	21	35	24
可愛そう	27	26	13	7	13	4	10	0
嫌なこと	41	33	41	32	37	22	40	14
楽になる	9	0	2	2	2	7	0	14
何も思わず	0	3	0	2	2	7	5	19

表 4

## 説明に関する細目の分類結果

	5 歳	6 歳	7 歳	8 歳	9 歳	10歳	11歳	20歳
	%	%	%	%	%	%	%	%
説明	15.0	16.7	15.0	13.5	17.6	27.9	42.0	57.0
他界	12.2	14.3	10.0	6.2	11.1	12.8	19.8	6.4
魂	0.7	2.0	3.2	2.9	2.5	5.2	10.2	11.3
転生	0.7	0.4	1.2	0.6	2.0	2.8	4.2	5.7
他の説明	1.4	0	0.6	3.8	2.0	7.1	7.8	33.6

## IV 考察

## IV—1 発言量の増大

表 1 の小計をみると 5 歳まで 53.1% であった発言量が 11 歳では 2 倍の 107.3% に漸次増加し, 20 歳では 114.4% になっている。発言量増大の要因は, (わからない) と答える子ども



もの減少、死に関する説明と事柄に関して述べる子どもの増加である。発言増をくっきりと表しているのは、(わからない)の減少である。(わからない)は、5歳から11歳の間に7分の1に減少し、20歳で3.0%に減る。

とくに7歳と8歳の間では32.4%から17.0%へと急激に減る。それまで死に関して沈黙していた子どもが発言するようになり、おもに事柄に関して述べるようになるといえる。10歳から11歳の(わからない)の減少にも有意差を認めるが、ここでは説明および事柄に関する発言量の増大がめざましい。それぞれ14.1%および9.7%の増加である。10歳から11歳の間では、二つ以上の項目にわたって重複発言している子どもの数が11.3%増加しているが、7歳と8歳の間では逆に8.2%減っている。(わからないと小計との年齢間の差を比較した。)つまり8歳前後では発言する子どもの数の絶対数増の要因がより大きいが、10歳前後では重複発言の増加要因が大きい。

このような変化の内容の差はあるが、子どもたちの死に関する発言量は、増え続けている<sup>8)</sup>。その内容を検討すると、事柄の項目の増加は情報量の増加を、説明の項目の増加は死についての考えが増えたことを表し、表2の同義反復の増加はむらがあるけれども死に関する言葉の知識が増えていると解釈できるのではないか。だが、説明が20歳になってなお増加しており、事柄はむしろ減少している点では二つは異なる。死の関するさまざまな事柄、事実に関する情報への興味関心はある程度知ることによって飽和状態になるが、死をいかに説明するかは20歳で半数以上の関心事だということであろう。

#### IV-2 感情表現は20歳では少ない

増加傾向を示すこれらに対して特徴的なのは、感情の項目である。8歳で37.0%のピークを示し、7、8、9歳で30%台を示す。7、8歳まで増加するが、9歳以降減少し、11歳で12.0%、8歳の時の3分の1に減り、20歳では7.9%に減少する。子どもたちに比べて、20歳という大人は感情の面ではクールにすら見える。

感情の各内容と年齢の間で対比が明らかなのは、子どもたちと20歳である。20歳において、(怖い)(かわいそう)はほとんど見られず、(嫌なこと)との表現は少なく、(何とも思わない)が突出している。各年齢での感情を100とした場合、どの感情内容がどの程度の割合を占めるかを計算すると、(何とも思わない)は子どものなかでは10歳の7%が最大であるが、20歳では19%を占めており、突出といわざるをえない。ここでも20歳はクールさを発揮しているかに見えるが、それが20歳という大人なりの死の受容なのか、感情の抑圧なのか、興味のあるところである。

そのほかどのような感情をもつかについての、年齢が変わるにつれての傾向はとくには見られない。ただ、(かわいそう)という表現は5、6歳に多く、年齢が上がるにつれて漸減する傾向にあり、20歳ではみられない。死ということを次第に自分の死として考えるようになるということだと解釈する可能性は、表2の(病気)と死をつなげて考える7歳までの傾向から支持されるようにもみえるが、ここに挙げた表では確信できない。

8歳前後に高い値を示す感情表現が20歳になって減少する特徴の要因として三つが考えられるように思う。一つは、質問の形式である。＜死ぬとはどんなことだと思いますか。あなたが考えていることを教えてください＞からは、感情について答えることは、考えという台詞や質問の意図から二次的であると受け取ることが挙げられる。調査の経験から言

えるのは、子どもの場合、20歳ほどには質問に応じて、自分の考えのうち相手の意図するところに合わせた答を選別して提出することはない、むしろ子どもの場合尋ねられたことに関連して自分の思い付くことを総動員して答える。20歳の場合、質問に精確に答えることができるだけに、質問の用語がより大きく答えに反映する。

二つ目には、20歳の大人が死について、嫌であろうと、どのような感情を持とうと、訪れることを知っており、避けられない事実として厳然として受け止めようとしているのではないか。あるいは、感情で表現する代わりに死についての幾多の説明、別言すれば合理化を準備しており、それによって死に対処しようとしているといえよう。このことは表4の、説明項目が57%、また他の多様な説明が33.6%であることから推察される。天国、地獄、魂の行方、転生など、また、無になる、解放、旅立ちなどの説明によって死の意味を理解しようとしているのであろう。そして死を意味づけることによって死に対する己の態度を決めようとしているのであろう。

三つ目には、現代史的な要因である。死に際して感情を抑制することが現代あるべき態度であるならば、20歳の大人たちはその雰囲気の中にあって感情を表出しないような思考を形成しているのではないか。大人への態度形成過程で幼いときのような感情の割合は抑圧されてきたという側面を否定できない。死に際して悲しみ、恐れ、嫌だと泣き叫ぶことは、現代人にとって子どもっぽいことであるのだろう。(死者や死と向き合う場は、感情を抑圧するべき場であるから、感情をあらわにする恐れのある子どもは遠ざけられる。)多感な時期を過ぎて大人となったときに人はクールになる、感情の項目が20歳になって7, 8, 9歳時の4分の1に減少するのはそのことを反映していると思われる。

死に際しての人々の歴史的な態度変化は指摘され始めたところである。「20世紀には、人目につかない変化が…生じたように思われる。…自然な出来事としての死は、ますます『口にできないこと』になった」<sup>9)</sup>死に際して「<泣きさけぶ>ことへの怖れと新しい形の羞恥心」が生まれており、「新しい慣例は、その(夫の死に際しての——引用者註)苦痛をおしかくすことを要求する」<sup>10)</sup>ようになっている。また、「どんな感情も外に出さぬという確信がもてたとき、はじめて人は」夫を亡くした者を受け入れるようになっている<sup>11)</sup>。喪の悲しみは今や慣習としては廃止された。

「19世紀に、『うるわしき亡骸』に別れの挨拶をしたことがないとか、人が死につつある場に一度も立ち会ったことがないという人は、滅多にいなかったであろう。葬儀は、労働者階級にとっても、中流階級にとっても、貴族にとっても、最大限に見栄をはる機会であった。共同墓地は、古い村ならどこでもその中心にあり、ほとんどの町で目につきやすいところに位置していた。犯罪者の処刑が世間への見せしめであることをやめ、その日が公休日にならなくなったのは、19世紀もかなり末になってからである」<sup>12)</sup>「19世紀における狂おしい悲嘆と劇的表現…」、「ロマン主義を特徴づける葬儀の大ドラマや墓参や熱狂的な思い出の崇敬」<sup>13)</sup>は、20世紀の中ごろには消えてしまった。

同様の流れは日本においても見られる。通夜が必ずしも夜を徹さなくなり、野辺の送りや霊柩車による運搬に変わり、葬儀や喪に服することが事務手続式的に行われることに人々が馴れていったとき、感情は密やかな私的なもの、公衆の前ではあらわさず、ごく内輪の人たちの中でしか感情に崩れてはならない、ひっそりと悲しみに入り込むしかなくなったといえよう。それは1960年代に変化したのではないか。むろん死をめぐる感情表出

の変化といったものはゆっくりとしか変わらず、通夜や盆や賀状の儀礼は残っており、霊柩車は目立つ格好で走っているとしても、喪の悲嘆は会社や隣近所ではもはや日常性をこわさぬ程度にさっと交わす挨拶程度に抑制されている。悲しみは押し隠すべきものになっている。そして、このような変化によって形成された大人としての態度が、子どもっぽさとは区別される。

#### IV—3 8歳前後は感情の時代

感情項目は、わからないを除くと6歳で最大の割合を占める項目となり、9歳で事柄の項目と並び、減少してゆく。5歳で事柄の項目が感情項目より多いのは、事柄の項目の割合が高いからではない。事柄の項目は5歳20.9%、6歳19.2%と変化しない。5歳から6歳への両項目の逆転は、感情項目の増加による。9歳から10歳の場合、事柄の項目は4.3%増であるのに対して、感情項目は10.3%減であり、ここでも感情項目の増減の方が大きいことがわかる。

7, 8, 9歳を死の意識を感情で表現する時代と命名できるかも知れない<sup>14)</sup>。このことは死の教育にとって意味をもつ。すなわち、道徳授業における、いわゆる心情と判断との問題で言えば、おおよそ小学校低学年の時代は、心情を中心にする資料が子どもたちの死とは何かの答え方により近い形であると読み取れるからである。

感情に関する細目のうち、どの項目が多く割合を占めるかを各年齢、多いもの二つを並べると次のようになる。10歳の22%と21%のように有意差の認められないものも同じく掲げる。

表3—3

感情のなかで、どの感情が上位を占めるか

5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10歳	11歳	20歳
%	%	%	%	%	%	%	%
嫌なこと	嫌なこと	嫌なこと	嫌なこと	嫌なこと	悲しい	嫌なこと	悲しい
41	33	41	恐い	37	30	40	苦しい
可愛そう	可愛そう	恐い	32	恐い	嫌なこと	苦しい	24
27	26	27	悲しい	36	22	35	何も思わず
			25		苦しい		19
					恐い		
					21		

「嫌なこと」は11歳まではほとんど最多であるが、特徴的なのは、5, 6歳で「可愛そう」、7, 8, 9歳, 10歳も含めて「恐い」、10, 11歳, また20歳も含めて「苦しい」が上位を占めている点である。可愛そう、の言葉はやはり自分以外のものに向けられている。恐さは死にたいする関心を現すと同時に自分もそこにかかわることを予想させる。苦しいは、死についてある程度想像がついていることを伺わせる。ここからは、5, 6歳はその気持ちの中で死を自分のこととして考えていない、7, 8, 9, 10歳は恐れを抱きながら死に関心をもち、10歳から上は死の苦しさを想像体験していると言えそうである。自分が死ぬという認識の転換期は6歳にあるらしい。というのも、同じ調査の＜自分はいつか死

表 5

自分はいつか死ぬと思いますか								
	5 歳	6 歳	7 歳	8 歳	9 歳	10歳	11歳	20歳
	%	%	%	%	%	%	%	%
はい	59.0	84.1	91.4	94.7	99.0	97.2	95.2	97.7
わからない	12.9	6.5	1.8	1.5	0.5	2.8	2.4	0.4
いいえ	28.1	9.4	6.8	3.8	0.5	0	2.4	1.9

ぬと思いますか>に対して表5のように、5歳から7歳の間の変化が大きい。

自分が死ぬ、という認識は、死に対応する視点を子どもたちに作り出していくのではない。自分の死を認識すると、知識として知っている程度のものかどの程度かは別問題として、また、死が自分の身近な者の死という形で自分にかかわってくるという認識を含めて、死に対応する視点を作る、ないしどう対応するかを迫られるがゆえに自分の態度を考えざるを得ないのではないか。この場合の視点ないし態度形成は、これまで死の認識成立の判定基準とされてきた死の普遍性や必然性の認識にまで至る必要はない。普遍性や必然性を基準として、子どもの発達の問題として、何歳で認識が成立すると言い、またそれへの反論として、もっと下の年齢で普遍性や必然性を認識していると論じられたりした。しかし自分の死の肯定、感情による反応、死にかかわる事柄の知識など総合的に認識成立に向かう道と考える方がより事態に近そうである。

<自分はいつか死ぬと思いますか>の「はい」の項目の増加と感情項目の増加とを比較してみると、5歳から6歳への前者の増加が1.4倍、後者が1.5倍、6歳から7歳で、前者が1.1倍、後者が1.5倍<sup>15)</sup>である。7歳以降自分の死にたいしては90%台の肯定回答が続く。

感情の項目の方では、それまで「可愛そう」「嫌なこと」中心であった感情面が、7歳から「怖い」「嫌なこと」の割合が増大し、感情による死への反応そのものが増加する。事柄に関しては、7歳から次第に発言が増えていく。

表1からは、原因、儀式の項目で8歳から9歳の間に変化が生じていることを読み取れる。死を語るのに、死ぬ原因を語る、ないし死にかかわる儀式について語ることが減少していく。

さらに表2で事柄の項目を見てみよう。「病気」の項目によって、死と病気との間の区別がはっきりしてくる様子を伺い知ることができるが、それは7歳から8歳の変化が大きい。「同義反復」の項目からは、死に関する言葉が、8歳になって増大することがわかる。8歳前後で何々ができないという考え方が増加（「できない」を参照）するが、それは死が今の生と対比されて何かができなくなることで認識されていくことを意味する。8歳と9歳の間で「になる」項目が減少する。死んでそうなる、例えば骨と、死が切り離されて、生にとって死が何であるかという方向で死について発言するようになるのだが、それは「消える」という消失が、8、9、10歳と次第に強く意識されるようになる点に現れる。

この事情を、表4からも読み取っていただろう。説明項目の変化は、8歳まで横ばいから減少傾向で、以後8歳の13.5%から1.3倍の9歳の17.6%、そこから1.6倍の10歳の27.9%、さらに1.5倍の42%と増加を続け、20歳では57%に達する。（この様子は図1の③説明のラインの8、9歳以降の急上昇に見て取れる。）ここに、死に関する意味づけがなされてい

くようすを見ていいだろう。就中「その他の説明」は、生に対する死の意味の説明、少なくともそのような表現形式となってくる。＜死ぬとはどんなことだと思いますか＞の問いに対して10, 11歳は次のような答もする。

「人生を卒業したこと（10歳）」「自分の仕事などを子孫に譲ること（10歳）」「人間に定められた運命（10歳）」「自分は二人生きていて、自分自体が死ぬともうひとりは友だちの心の中に残っています。その友だちが死ぬと自分も死にます。（10歳）」「神さまのもとへ命を捧げること（10歳）」「生命を失う…本当の世界へゆく（肉体は仮の姿）（10歳）」「人生のゴール（10歳）」「人生は神様のテストだから、死ということは立派になったということ（10歳）」「みんなと別れて、記憶が消えて、生まれ変わる（10歳）」「死というのは生物みんなにいつかはくる大切なものだと思います（11歳）」「その人にとって最後の出来事（11歳）」「悪いことをして死ぬのと、いいことをして死ぬのがわかる時（11歳）」「自由ではいられないこと（11歳）」「自分の生きているうちの反省だと思います。自分がどういうことをしたのか見てみる（11歳）」「死ぬとは無になることだと思う（11歳）」「生まれ変わるときの着替えみたいなもの（11歳）」「勇気のいることだと思う（11歳）」「地球からあの世へ移り変わるだけ（11歳）」「生きる力がなく、希望を捨てることだと思う（11歳）」「命（たましい）がしおれて、働き疲れて、天国へ登っていく（11歳）」「生きる苦しみから解放され、美しい場所に行くこと（11歳）」

表4の「他界」は、8歳で6.2%の最低となり、11歳まで増えて19.8%になる。「魂」について言及しているかどうかの項目は、9歳と10歳の間にターニングポイントがある。「転生」の項目は、8歳と9歳の間で増減の傾向が逆転する。その「他の説明」では、9歳と10歳の間で変化し、20歳に至っては33.6%と、死についてさまざまな説明を用意していることがわかる。死に関する説明については、概略9歳前後にターニングポイントがある。5, 6歳の説明は、天国に行く、が大部分で、これを含む「他界」の項目が説明全体のそれぞれ81%, 86%を占める。天国などの説明は、大人による子ども向けの説明の再話を聞いている感があり、天国についてくわしく尋ねると、雲の上にある、飛行機で行くんだよ、といった答が返ってきたりする。

## V 結語

### V-1

以上の結果から、次のような図式を読み取ることができよう。自分の死にかかわる認識の7歳までの増加が死に対する感情項目の増加となって現れ、7, 8, 9歳で感情による反応のピークを迎え、その際死に対する反応は「可愛そう」から「怖い」への質の転換が起こる。さらに7歳から8歳へと死に関する情報が増えていき、8歳前後に死の周辺、病気や死の原因と死そのものを区別し、事柄の認識の量的増大と、8歳前後での事柄の認識面での、死という事柄に限定した発言をしていく転換が生まれる。死に関する説明となると9歳前後になって変化が現れる。死が生とのつながりで意味をもち始めるのであろう。

### V-2

学校教育の授業との関連で具体的な例をあげておく。『ずーっと ずっと だいすきだよ』<sup>16)</sup>が、三村図書、こくご一、に取り上げられているが、死を扱った絵本からの採用と

して注目される。飼犬の死と楽しい記憶、老衰死、埋葬と先のペットへの愛着からは離れるが愛情をもって次のペットを飼うかもしれないということが綴られる。犬と少年との交流から死、将来への展望まで周到に扱ってすぐれた作品である。これを教材ないし資料として取り上げる際に、次の点を考慮すべきであろう。小学校低学年の年齢層が人に対する記憶（9歳まで2, 3%台）よりも、感情（6, 10歳で20%台, 7, 8, 9歳で30%台）の面で子どもたちが心動かしているのを見ると、子どもの中のペットとの過去の交流や記憶が生き続ける点を取りあげるより、子どものなかに形成された心情の面からとりあげる、道徳においては共感資料と呼ばれたりするが、ことが子どもたちの実状にかなっている。その心情とは簡単に言葉でいえば死を通しての生あるものへの愛情ということになるが、「だいすき」というこの本に流れるいわば通奏低音が心地よく響けばいい。国語の教材であるが、生命尊重の資料として価値がある。

## 註

- 1) 「モラルジレンマ資料」との表現を使うのは荒木紀幸らである。ここではジレンマを抜け出す際に新たな価値の構造化がおこなわれ、そこに道徳性の発達生まれる、との基本命題がある。
- 2) 「あひるの があこ」「かげふみ」「たった一日のいのち」（以上低学年）「金魚の死」「わたしのたんじょう」「お母さん、なかないで」（以上中学年）「山田君の手術」「ライオンと子犬」「パスツールの研究」（以上高学年）「かけがえのない命」「色と糸と織りと」「生きる喜び」（以上中学校）などを具体的に挙げるができるが、優れた資料が少ないために、自作資料で行われる授業も多い。「はかまいり」を取り上げた資料もあり、家族愛のための資料とされるが、死や生を考えることのできるテーマである。
- 3) 例えば従来死の不可逆性や普遍性の認識成立によって死の認識が確立したと判定されてきた研究の方向があった。このことと親をなくした子どもたちが「74%の子どもが親はある特別な場所にいったと信じており、たいていは天国について語る。57%が亡くなった親に話しかけており、そのうち43%が、より若い子どもにその傾向があるのだが、答えてもらったと感じている。81%が死んだ親が彼らを見つめていると考え、このことが彼らの57%を驚かせ、彼らの落ちつかなさ、やっっていることに死んだ親は賛成してくれないかも知れないとの恐れに関係している」（Silverman, Phyllis R. & Worden, William J.; Children's reactions in the early months after the death of a parent, Amer. J. Orthopsychiat. 62(1), January 1992, p. 100）という実状とは、認識の確立の水準、安定した知識として知っていることが認識の確立だどこまで言えるかの問題を改めて提起するように思われる。子どもにおける死の概念形成と、死への対処機制とは即応しないのではない。
- 4) 本論では長崎の子どもたちを調査対象とした。そこには、長崎を中心にした子どもたちの研究が日本文化圏の子どもに妥当するとの前提が含まれる。
- 5) Mark W. Speece & Sandor B. Brent; The acquisition of a mature understanding of three components of the concept of death, Death Studies 16, 1992. この論文では、これまでの子どもの死の意識に関する50以上の論文のなかで最も広範に扱われてきたのが universality, irreversibility, nonfunctionality であったと言う。(p. 211)
- 6) Heinz-Joachim Klatt; In Search of a mature concept of death, Death Studies 15, 1991, pp. 177~178
- 7) 上蘭恒太郎; 子どもの意識における死の擬人化, 長崎大学教育学部教育科学研究報告第43号, 1992参照
- 8) 発言量の増大は、発言内容からも伺われる。5歳の場合「死んじゃうこと」といった質問された言葉の繰り返しが含まれるが、年齢が上がると「命をなくすこと（7, 8, 9歳）」「一生を終える

(10歳)」といった別の表現による同義反復になる。

- 9) Geoffrey Gorer; *Death, Grief, and Mourning in Contemporary Britain*, 1965 (宇都宮輝夫訳; 死と悲しみの社会学, 1986, 207頁)
- 10) フィリップ・アリエス, 伊藤晃, 成瀬駒男訳; 死と歴史 西欧中世から現代へ, 1984, 231頁
- 11) *ibid.* p. 233
- 12) G. Gorer; *ibid.* p. 207
- 13) アリエス, *ibid.* pp. 224~225
- 14) 宮本一史は, 「小学生の方が中学生より死のイメージは感情的」と述べる。これは小学校4年生から中学校3年生までを比較した場合である。(稲村博, 小川捷之編; シリーズ・現代の子どもを考える16 死の意識, 第2章 現代の子どもは死をどう考えているか 第3節 死に対する感じ方・考え方, 共立出版, 1983, 71頁)
- 15) 年齢を4歳まで下ろしてみた場合にも同様の相関がある。サンプル数104で4歳の, 自分がいつか死ぬとおもうか, に対する「はい」の答が41.3%で, 5歳への増加1.4倍, 感情項目が12.5%で, 同増加が1.3倍。
- 16) ハンス・ウイルヘルム, 久山太市, 評論社, 1988。またスーザン・バーレイ, 小川仁央訳; わすれられないおくりもの, 評論社, 1989, なども死を扱った資料の一つである。この本では, あなぐまの死の場面を終えると, 後に残る動物たちの記憶の中の, それも美しく心温まる追憶が綴られる。死んでゆく場面とその際の感覚を描いている絵本としても注目される。ここでも記憶の内容よりも冬から春への展開で象徴される心情に中心をおくべきであろう。なお死を扱った絵本については, 上蘭恒太郎; 民話による道徳授業論, 北大路書房, 1992, 第5章第1節の2に詳しい。